



目次

【詩】 深い記憶 中村正秋 4

【詩】 たいら 秋網まさお 6

【詩】 日曜画家 やまうちあつし 10

【詩】 わたしはわれを差し出して 真野絵里加 12

情報短信 (From Koguma) 14

【詩】 崔君<sup>チユ</sup> 金子忠政 24

C氏 24

微笑み 25

【詩】 歩く道 小熊昭広 26

【詩】 子は、聖職者になりたいと言う

ランダム・メモリー

表紙画

URL: <http://tsurumakidou.xxxxxxxx.jp>

明才

# 深い記憶

中村正秋

穏やかな時間が 左から右に流れて

右目に映る 悲しみや 惨状を

左目の泪で 潤す

うつろな空 ただよう時

よりそう風 定まらぬ色

始まりは いつも唐突にやってくる

空が闇に蔽われて 闇は縁を 折り曲げて

終わりからは 想像もできないほどに

街は 人であふれかえり

無機質に研ぎ澄まされた目が

人の心を 盗み見ようとする

恐れを知らぬ少女の言葉は

世界を貫く力を宿している

戦いに 勝つのではなく

戦いを 起こさないために

わおーん  
るらーん、  
おもねている

生ゴムの半睡  
虚脱の錘は霞 尖っている  
風景は素知らぬ顔した大食漢

わおーん  
るらーん  
手 はなせば

私の息遣いをなだめてくれる  
堆いのちの  
藁しべの

中庸の  
あの人懐こいのちの  
絶対温度つめたさの

どうやら  
私は  
半透膜をにじる困難に直面している

私は  
まるで爆薬仕掛けのミラーボールに  
身をよじり食らい付く

血みどろの真珠玉が こつん  
と音を立てるたびに  
平らになるから変なものです  
耳朶ですか、  
礼儀というか  
なに、つぶやきのよすがにでもと

とうとう  
川面をのぞくほどの  
風も立ちません



とても質素ですが、芸術の香りの溢れる素敵な空間です。定禅寺通りに面するビルの奥にひっそりとお店はありますので、静かな時間を過ごすのに最適な喫茶店です。

喫茶

ホルン

仙台市青葉区立町の喫茶ホルンです。フレンチプレスで抽出するスペシャルティ珈琲や南インドカレーなどをお出ししています。

営業時間 火曜～土曜 12:00～21:00  
日曜 12:00～19:00 (月曜定休)

所在地 〒980-0822  
宮城県仙台市青葉区立町26-17-202  
(定禅寺通り・せんだいメディアテーク向かいの甘栗屋さんの2Fです)

電話 022-711-5520

Twitter : @kissahorn

URL : <http://kissahorn.blogspot.com/>

!!! ランチプレートを始めました!!!

お昼の午後12時～午後2時は南インドカレーのランチプレートもあります。ドリンクも150～200円プラスでオーダーできるお得なサービスです。

# 日曜画家

やまうちあつし

せつかくの日曜なのに  
私には描ける絵がない  
私には筆がなく  
私にはカンバスがない  
私の街には森がなく  
湖がなく  
私の台所には  
新鮮なオレンジも  
燃えそうなリンゴも  
清楚な百合も置かれていない  
そして何より

描くべき誰かが  
居間にも寝室にも  
公園にも学校にも  
街中を探しても  
見当たらない  
私は途方に暮れる  
こんな日曜はめったにないのに  
膝をつきうなだれる  
私はいつしか  
一枚の絵になっている  
やがて越してきた  
見知らぬ人が  
部屋の壁にその絵を飾る  
こんな日曜はめったにない

# わたしはわれを差し出して

真野絵里加

わたしはわれを差し出して、  
ぼんやりしていたらいつのまにか、  
やわらかな布で目隠しをされていた。  
その、あたたかな暗闇の中の幸福。

そのうち暗闇にある気配がして、  
口にも物を入れられるようになった。  
さらさらした小麦粉や、うすく切られた果実の断片。  
わたしはそれを舐めとった、音なく噛んで、飲みこんだ。  
ときにはそれはガラスだったりざらついた木端だったりした、  
そんなときは目を覆う布のあいだから

涙を流して、わたしはそれを飲みこんだ、  
そうすることで何かを証明、しようと、した。  
いちど、角砂糖を舐めさせてもらえたこともあった。  
ボンボンの香りを嗅いだこともあった。

そのあと何もおこらなくなった。  
わたしはさかなが餌を欲する仕草で、  
口をばく、ばくと開いたり閉じたりしてみたが、  
暗闇はなにもこたえなくなった。  
暗闇じしんが消えてしまつて、  
あとには目隠しされたまま、口を開けたわたしだけが残った。

▼2014.12.07 ポッドキャストの収録。詩の書き方の話。  
▼2014.12.09 詩誌『再生』で号のデータを印刷所に入稿。ポッドキャストの編集作業。

▼2014.12.12 人間ドックの日。胃の内視鏡検査の時に、ベッドに横たわって静かに待っていると、医師と看護婦が妖怪ウォッチのカレンダーを買ったという話題で盛り上がりしている。緊張感が和らぐが、検査時に内視鏡のケーブルが喉に引っかかり、なかなか進まず、難儀する。緊張が走るも、若い医師の日常の中では、私の存在は皆無に等しい。

▼2014.12.13 ポッドキャストの収録。録音ボタンの押し忘れがあり、ほとんどの会話が収録できず。やらせで、再度収録するも、きこえない。絶対音階の話。

▼同日 詩誌『霧笛』第二期第三二号を拝受。今年の七月末に大船渡を所用で尋ねる途中、編集人の千田氏に会うために気仙沼に寄り道して、街の中の小高い丘にある市立図書館に行った。千田氏によれば詩誌『霧笛』の代表者は創刊同人である西城健一氏であるということだ。



千田氏が午前の仕事を終え、昼食を済ませて執務室から出てくるまでの少しの時間、私は、図書館の中の迷路のような書架の間を、目当ての書物もなく、彷徨っていた。そして、なんとはなしに詩集が置かれていた棚に近づき、幾冊か手に取っていた。すると青い表紙の『美しい村』という詩集が目にとまった。作者は、西城健一。ちょうど、夏の陽射しが強く、図書館の敷地はまだ山の面影を残し、今も生い茂る大木の影が

な書き手がきちんと存在しているというこの強みを私はどうしても考えう。そして、そこに千田氏などが、新しい風を吹かせている。とても、気持ちの良い詩誌です。

西城氏が気仙沼の詩の鉱脈を受け継いでいる、あるいは掘り出しているとする、その作業は、小野寺氏達に繋がっていると思う。その鉱脈から、他の方々の作品が編み出されてゆくという構造はとてもうらやましく。

▼2014.12.14 繁昌院での亀との句会。私の句はひとつも選ばれず。期待はしなかったが、いざとなると落胆あり。

▼2014.12.15 二〇一三年一月の無意味な意味の尾形亀之助読書会でのイラストレーター、村上かつみ氏の講話を通信誌へ、全文掲載する許可を得る。ありがたい。

▼2014.12.17 二月にやろうとしていた通信高校に関するシンポジウムの助成事業の承認得られず断念。落胆あり。

▼2014.12.19 詩誌『再生』第7号が印刷所から送られてくる。

▼2014.12.20 詩誌『再生』で号を仙台市内の喫茶店や施設等へ置かせていただくための作業、終日。

▼2014.12.21 ポッドキャストの収録。詩人の定義についての話。

▼2014.12.22 数年ぶりに実のついでたけずの収穫作業。

▼2014.12.25 やる気なし、失せる自分。

▼2014.12.27 長谷川郁夫『吉田健一』(新潮社)を読み始める(結局、読破できず)。

▼2014.12.28 詩誌『再生』で号の贈呈分の発送作業。見知らぬ方へはなるべく送らないようにしようと思う。それよりも、誰にでも手にとってもらせる場所に置くことに比重を傾けたい。

▼2015.01.06 リチャード・ギルマン、訳塩尻恭子『現代演劇の形成』(論創社)を読む(面白いが、結局読破できず)。

▼2015.01.11 『談 100号記念選集』(編集:公益財団法人たばこ総合研究センター、発行:水曜社)を読み始める。

▼2015.01.13 『談 100号記念選集』、仲正昌樹「虚構としての八自由

建物の中まで伸びてきて、古い木造のひんやりとした竹まいの中、その午後の時間は、陰影が美しいひとときであった。そんな、優しい風も吹き渡る心地よさに包まれて、青い表紙の詩集の中の言葉を目にした。「ああ、これが詩誌『霧笛』原点なのか」と、ひとり、ため息をついて。それから、私の詩誌『霧笛』に対する思考は、緩やかに、いや直角に曲がったような気がする。しかし、直角に曲がったのは、詩誌『霧笛』のことではなく、私の詩に対する思考なのかもしれない。

変な前置きを書きましたが、詩はいわゆる現代詩でも、近代詩でも、戦後詩でも、恋愛詩でも、未来詩でも、どんなものでも、今、読まれるものならば、「それは今の詩だ」と言い放つことは十分に可能だろうと思う。それは逆に、読まれない詩は、時代が新しいものだろうが古いものだろうが、今の詩となる可能性を秘めているということである。

その間に分かれ目など、ほとんどない。何が良くて、何が良くないのか。何が古くて、何が新しいのか。それは、ひとそれぞれのことである。ただただ良いものは、「良い」と語るだけで、悪いものは、「悪い」と語っても良いのだ。どうしても人は、この世に自分のことを悪いという者がいることを気にしてしまう。他の何ものとも比べようもない、この世でただひとつの作品であるとは、なかなか割り切れない。

また、関係のないことを書いてしまったが、西城氏の作品に強く感じたのは、「変わっていない」ということだ。それは、変化がないということではない。「変わらない」ということも、時代が変わり、人が変わり、環境が変わる中では、相対的に変化していることになる。その中で、自分の座標軸をしっかりと地に差し込んで、じっと立っている、そんなイメージだ。だからこそ、見えてくるもの、見えてくる風景がある。

例えば、「一時期の心の揺れや、感情の変化、日々変わる繊細な人との関係、そんな日常の、いや非日常も含めた人の「生」の中で、溢れ出てくる言葉に透き通ったその人の内蔵のような身分が綺麗に表現されることも、とても素敵なことばの表現なのだが、それと同じく、一点で頑固に変わらないことも大切なことである。

詩誌『霧笛』は、これからずっと変わってゆくだろうが、西城氏のような

な主体へ。自由についての思考、おもしろい。

▼2015.01.14 『談 100号記念選集』、萱野稔人「労働と賃金の分離」の前で資本主義は沈黙するか、国家の暴力という考え方。

▼2015.01.18 午前、塩竈市の旧公会堂を改装した杉村惇美術館。塩竈という土地の持つ感触を強く感じる。午後、仙台での映画『ファルージャ』の上映会。伊藤監督と雑談。

▼2015.01.20 『談 100号記念選集』、木村大治「どのように八共在る」のか・・・双対図式から見た「共在感覚」、共在ということ、共同体以前の対立軸を有しない世界？

▼2015.01.21 『談 100号記念選集』、酒井隆史「匿名性・・・ナルシズムの防衛」、記憶に残らない、これは匿名性とは真逆なことだろうか。

▼2015.01.22 『談 100号記念選集』、酒井隆史「匿名性・・・ナルシズムの防衛」、匿名性があればあるほど狭くなる、ちくり、が正当評価される世の中のおもしろさ。その中にいることが嫌になる気持ちがよくわかる。

▼2015.01.24 第十九回無意味な意味の尾形亀之助読書会。ゲストは、気仙沼で詩誌『霧笛』の編集人を行っている千田基嗣氏。日帰りとなってしまったが、遠路はるばる来ていただいたことに感謝。講話の半分は震災のこと。同人誌のあり方についての、あたりまえのような基本的な話に、改めて自戒の念を持つ。また、小さな都市でも詩誌があることの豊かさやうらやましく思う。必要以上にその土地で書くことの意味を意識していないことに、千田氏らしい距離の取り方、物事への接近の仕方を感じる。

▼2015.01.27 『談 100号記念選集』、河野哲也『「ころ」は環境と共にある』、やはり残っていない。外と内、相互作用、どこまでも揺れる存在、関係のない関係性。

▼2015.01.29 『談 100号記念選集』、金森修「生命とリスク・・・科学技術とリスク論」どこまでもリスクは続く、それは過去の知識から導きされる、わたしは単にその代弁者。

▼2015.01.202 『談 100号記念選集』、高橋昌一郎「理性主義を超えて・・・思考停止からの出発」絶対というものが無いということの理性主義、



「こつても理性主義？」

- ▼2015.02.03 『談 100号記念選集』今福龍太「偶有性を呼び出す方法、反転可能性としての…」近代のシステムは輪郭を綴じようとする、偶有性(可能性)を保つためには、「薄墨色の文法」を表す。
- ▼2015.02.05 『談 100号記念選集』山岸俊男「リスクと社会の条件」意思決定とはリスクを取るか取らないかということ、つまり「腹を括る」時。
- ▼2015.02.06 『談 100号記念選集』岡崎乾二郎「見ることの経験」近くの錯乱性、時空や時間を飛び越える可能性がある、プルネルスキの透視図法。
- ▼2015.02.08 『わきサンシャインマラソン』午前九時スタート。八、八キロの第一関門は午前十時頃通過、予定通り。しかし、十五キロ付近から右足の付け根の痛みが出る。そして、次に左足のふくらはぎに違和感。右足をかばってしまっって、中間地点を過ぎたところで、左足の太ももが痛み出し、足がスムーズに上がらない。中間地点は二時間半で通過。ここまで、まあまあ。そこから地獄。三十キロ辺りでは、足がほとんど上げられず。なんとか、五時間四十四分でゴール。
- ▼2015.02.09 『談 100号記念選集』石黒浩「最後に人間に残るもの、人こそが人を映し出す鏡」ロボット、引き算、取って人に似せる、そこで何が違うか、違和感は外見にはない？
- ▼2015.02.10 『談 100号記念選集』植島啓司「快樂のさまざまな様態」あまり感心しない文章。快樂は罪ではないとのこと、それが変に感じるわたしは間違った人間になったようだ。
- ▼2015.02.11 『談 100号記念選集』【対談】石毛直道×華山絢一「カストロノマドロジーの事始め」正直気持ち悪かった、どうしてこういうことを考えるのだろうか、性と食は、人間を筒と捉えることにおいて同じことには違和感、人間は糞の塊とは同意。
- ▼2015.02.16 『談 100号記念選集』安保徹「こころからだをつなぐ免疫機能…顆粒球とリンパ球からみた人間」自律神経(副交感神経、交感神経のこと)、興味を持って良いかも、メモ:それと共感覚との関係。

社会民主主義の違いがわかったような。

- ▼2015.03.08 『安藤礼二「折口信夫」を読み続ける。やっど「しとしと」が理解できてきたような気がする。
- ▼2015.03.15 『日曜美術館』山下りんのイコン。
- ▼2015.03.21 『第二十回無意味な意味の尾形龜之助読書会』ゲストは岩下祥子氏。彼女は、朗々と語り始める。彼女にとって、龜之助とはどういう存在なのかわかるような気がする。「詩」とは、いったい何だろうかとか、別なことを考えてしまふ。彼女の言葉から考えると、抽象(曖昧あるいは揺らぎ)あるいは「際」を独りの中に具象として伝えること)だろうか。
- ▼2015.03.22 『安藤礼二「折口信夫」を読み続ける。最近読みが進まない。靈魂(たましひ)、憑依。
- ▼2015.03.29 『ポッドキャストの収録、久しぶり。
- ▼2015.03.30 『倉敷の瀬崎祐氏の発行する個人誌「風都市」第二十八号が届きました。私のような者に送っていただけのも嬉しいのです。今号は、八水の時／シリーズ(そう言うって良いのでしょうか?)がありませんでした。八水の時／シリーズの言葉達は、とても心地よくて、静かに流れてゆき、疑念を孕まない作品達でした。そういう、印象があります。しかし、今号には八水の時／シリーズがありません。その代わりに、瀬崎氏のシリーズものとは違う、独立した作品「揺れる」と「ミカサ屋」という二篇が収録されています。



どちらの作品も、疑念が生じるものでした。

例えば、「揺れる」では、突然、冒頭の四連で、湿った季節には、電車の中にびっしりと草が生えていると書き出します。前提がないので、状況がつかみません。そして、その電車の中には、十

人の客が乗っており、電車が大きく曲がると、思わずつり革をつかんだ手は九本しかないと言葉が行分けられながら、詩の言葉として続き、最後

連)。

- ▼2015.02.17 『安藤礼二「折口信夫」(講談社)を読み始める。』談 100号記念選集』【対談】河本英夫×宮本省三「私はどのように動いているのか…運動・予期、リハビリテーション」、荒川修三の三鷹天命反転住宅のこと、認知運動療法(行動認知療法に通じるヒントあり)
- ▼2015.02.18 『談 100号記念選集』本川達雄「身体サイズ、身体の時間」、体積の四分の一乗の時間の速度…思考が中断。
- ▼2015.02.19 『談 100号記念選集』池谷裕二「時間は脳の中でどう刻まれているのか:生命、複雑系、記憶。正確に記憶することの困難さ、苦痛、アバウトの感覚、受覚の必要性、そんなことか。
- ▼2015.02.20 『談 100号記念選集』一川誠「生きられる時間」はどこにあるのか…高速化の中、時計からはみ出す私」認知は遅い、その前に私達は感じる。
- ▼2015.02.23 『談 100号記念選集』入不二基義「無内包の「現実」あるいは狂った「リアル」、列の関係(前、後、今)は、相互の関係だけれど、相対的に眺めると本当にそうなのか、時間の裏側に貼り付いている時間の推移。計る側の時計と計られる側の時間は異質であるということ。
- ▼2015.02.24 『談 100号記念選集』下條信輔「オートノマスな脳…知覚の現象学、脳の現象学」、わけのわからない存在を認識できる脳とは、既知のみではなく未知のもの、未知の物として認知できるこの柔らかな、いやいいかげんさ。
- ▼2015.02.25 『談 100号記念選集』池田清彦「構造主義進化論の試み」、構造を仮定しなければ世の中を捕らえることができない。その瞬間、既存ということになり、取り残される。じゃあ、時間を導入すると、どうなるか、構造進化とは、よくわからない。
- ▼2015.02.26 『談 100号記念選集』金子邦彦「生命システムをどのように記述するのか」、よどみという考え方、緻密になればなるほど、遊びが必要か？
- ▼2015.02.27 『談 100号記念選集』広井良典「いのち、自然のスピリチュアリティ」、最後だった。よく理解できず。保守主義、自由主義、

に次の八行で作品は終わります。

揺れるものをつかもうとしなかった手は  
代わりに  
なをつかまえれば  
安楽の地にたどり着けたのだろう  
遠いところから来た人が  
背後を過ぎる  
暗い雨の匂いが  
した

詩「揺れる」最後の八行

とても、わかりやすい状況を描写した作品なのだと思いますが、その中に疑念を生じさせる言葉があちらこちらにあります。

例えば、揺れる電車の中で、自分の姿勢を保つためにつり革を掴まなかつた一人の人が、どうしたのか。それを、気になるというのなら、代わりにを掴まっていたのか、若しくは、よろめいたのか、という、直接的に前の言葉の状況に繋がるような言葉が生じることが自然なのではないか。そうであれば心地よいのです。しかし、この作品では、そうではなく、「なをつかまえれば」安楽の地にたどり着けるのだろうか」という、飛躍した言葉が表れます。「安楽の地」「たどり着けるのだろうか」というとても日常的に使うものではない言葉が現れます。

草がびっしり生えている電車は、非日常で、その中で立っている(つまり生きていく)十人の中に、日常に何の疑念も感じずに無意識に生きていく人が九人にて、残りの一人は「電車の揺れ」という日常の出来事には意識が向かない。そんなことはどうでもよい、それよりもっと大切なことがあると言いたそうな手です。それは、自分が生きるということに疑念を抱いているとも感じ取れるのです。例えば、この現実には生きる価値を見いだせないでいる、そういう人間を描いたと思わずにはいられません。

そして、最後の三行は作者の言葉なのだと思います。

この詩は、深読みすれば、この個人誌の最後に書かれている日録との関連から、まさに東日本大震災の被災地で瀬崎氏が感じたことを表現したものだと思いました。題名自体が、まさに「揺れ」です。

二つ目の作品「ミカサ屋」も、疑念の言葉がある作品だと感じました。疑念とは、生きることへの不信なのかもしれません。

▼20150405 佐藤洋子さんの詩誌「a.s」三十四号が届きました。それも二冊、感謝です。一冊は、佐藤洋子さんから、もう一冊は新田一文さんからです。色違いなので、どちらも大変うれしいです。

新田さんからの私宛の添え書きメモを読む限り、新田さんはジャズに造詣が深そうです。そして、今号には「テイク・ファイブ」というジャズの有名なヒットナンバーを題名にした作品を発表しています。新田さんの言葉は、ディブ・ブルーベックの奥さんが、曲が世に出た後に付けた歌詞の内容との対比で読むと面白いのです。

たった五分、それも本当に無駄な五分かもしれないけれど、その何でも無い時間が必要なよと、どちらの作者も言っています。「なんでもない」ことは、新田さんの詩の真骨頂ですね。そして、真骨頂と言うのなら、次ページの「うつらうつらの哲学」の作品の方が、新田さんらしい作品だと思います。ちょっと失礼かなと思いますが、最初の行と最後の行だけを引用させていただきます。



「ろりと横になって考えてみるに

(中略)

うつらうつらは極楽の入り口なりとの考えに至る

詩「うつらうつらの哲学」最初と最後の一行

この引用の間の(中略)の中に、「ろりと」、「ぼかぼか」、「ついつい」、「うと」と、「うつらうつら」という擬態語や擬声語による言葉が詰まっています。

なにやら魔法の言葉をかけられた気持ちになります。そして、行の中に「死」という言葉がちょっと現れます。なんとではなく、読んでいると、人はこんなふうな感覚で生きている、生きること、死ぬことができるのだからなと思ったりしてしまいます。

それが、幸福なのか、それとも不幸なのか解りませんが、思考しない感覚の言葉がすつと出てくること。状況をあえて作らなくても、あえて文章に装飾を凝らさなくても、読めることに感心します。

一方、佐藤洋子さんは「水は、いつも結ばれようとして」という作品を発表しています。冒頭の第一連を引用させていただきます。

真野川の、  
わたしを横切っていく足下を流れる水の、その水  
どが、ひとつの個なのか水へと呼びとめられるかたち

詩「水は、いつも結ばれようとして」冒頭三行

真野川とは、福島県飯館村を流れる川です。佐藤洋子さんの詩は言葉の音の響きが、意味以前の「存在すること」を成立させているものだと思います。とても理解できない部分が多いのですが、この冒頭の三行はすつと私の中に入ってきました。

それは、どうしてか。冒頭の一行がいいのです。地名を呼ぶということは、地霊と交感することなのかと思います。地の霊は、水となって作者に、呼ばれることを待っていたということかもしれません。

きます。

あなたはきれいな膝小僧のために世界を救う  
ピクニックに誘い  
木漏れ日を掻き分け  
小さな拳銃を突きつけ  
古いライトウェイを荒馬のように乗りこなし  
風もないのに  
風に巻かれて立ち去った  
ふくら尖った唇  
ひきしまった乳房

「真野川の」という言葉は、書かれたものではなく、佐藤洋子氏がその土地で聞いて、呼んだ言葉なのだと思います。それが、この詩と行の中になつて書かれることで、彼女の中では意味を拒絶する絶対的な言葉が成立している、ということなのだろうと思います。理屈は要らない、ということでしょうか。地名は、様々な感情を孕みます。それが、その呼び名を聞いた人、それぞれで既に成立している言葉なのだと思います。新田氏が、私に送ってきた添え書きメモには、佐藤洋子氏の詩がとてもいいと思っていますと書かれています。こういうことだと思います。つまり、新田氏のなにげない言葉が、佐藤洋子氏においては、一言、声を発するだけで成立してしまう、ということなのです。

▼20150406 定期的に発行が続いている季刊『ロシア共和国』vol.17が届きました。いただいて、最初に読んだ金澤一志氏の作品「記号スクラブ」は、他人行儀な表現だなと思ってしまいました。多分、金澤氏は、自分の立つ位置が他所(よそ)にしっかりとあるのだろうと思います。「他所」とは、詩の世界の外での思考ということ。発行者の秋亜綺羅氏の編集前記を読むと、金澤氏は、北園克園の研究者だそうです。そういうことが影響しているのだろうと勝手に思ったりしています。よく研究者のように実証的に客観的な目で物事を見ようとする方々の書かれる実作は、「よそよそしい」ものが多かったりする、というのが私の経験則です。

どうして「よそよそしい」のか。それは、物事がよく見えているからなのだと思います。そして、金澤氏にとって、世事の出来事や事物が、こ



とごとく、あたかも記号のように見えてしまいい視界にフィルターをかけることになるのかもしれない。そうだった、金澤氏の思考を経て視界を通過したものの、物証が示すものが言葉として頻繁に出て

#### ●同人住所

中村正秋(裏表紙に記載)  
小熊昭広(裏表紙に記載)

#### ●寄稿者住所

秋網まさお 仙台市青葉区葉山町3-5-201  
やまうちあつし 名取市増田一丁目13-18-10  
真野絵里加 i.itohen@gmail.com  
金子忠政 白石市福岡長袋字永坂15の1

あなたの美しい膝小僧が  
世界に異を唱えている

### 詩「記号スクラブ」最後の一連

こういう発語の主体が、外の世界にある言葉の使い方は、いわゆる詩的な表現の中に埋没してきた詩を書くとうとする者にとっては、とても新鮮に感じ取れます。それは、明治以降の、それまでの鎖国政策から欧米の文化を積極に取り入れ、その刺激によって、日本の文化に新しい風味が生まれたことと、ほとんど同じように感じます。

この「あなたは(の)・・・」と書く時、作者は思入れを込めているわけではなく、自分はそうじゃないということ、そして醒めていること、詩的な表現、情緒を否定しているのではなく、これまでにない方法論で詩を書くように感じます。その結果、外的刺激によるある種の新鮮味が詩行に含まれます。そういう意味で、とても新鮮な作品に、私は感じました。

黒崎立休氏の作品「あざ」は、こちよく読みました。多分、心地よく読めてはいけない作品なのだろうと思いました。つまり、この詩を読むことで、読む側の人間、その人間自身自身の意識の中に、あざのような、ざらざらとした異物感あるいは不快感が生じることが必要なのだと思います。

すてられたさかなの息で、そのからだは微かにためている。  
土にまみれるとそのみずつばさがきわだつ、生きて、いようとすることがようやく、おかしくなる。死ねばいいのにと、ひとのや  
さささで言える、

### 詩「あざ」第三連

という立ち位置からの客観的な視野で言葉を使うことには、前記したこれまでの詩の表現がなくても、作者の中で言葉遣いが理にかなってれば、それは詩と言えるという、詩として成立しているということだと思います。そして、秋亜羅羅氏の作品「メモ帳はないか」は、上記二人にはないものがあります。これまた、よそよそしい、ではあるのですが、外の立ち位置から客観的な視野で言葉を遣うのではなく、主観的に遣おうとするへ混乱Vがあるような気がします。それは、最初に述べた他人行儀なことと関係あると私は思いました。

人形が  
解体したかったのはなんだったろう  
かたちでなく  
たぶん、ひと

ぼくたちが  
カットしたのはなんだったろう  
複数形じゃなく  
リストと呼ばれるたぶん、ぼく  
ぼくは昨晚  
雪見だいいふく 作り方 で検索しました

### 詩「メモ帳はないか」最後の五連

つまり、よそよそしい。「あなた」は、あえてここでは「ぼく」という自分自身であるかのような主語を遣い、本当は他所(よそ)なのに、今所(ここ)であったかも起きているような混乱を生んでいるのではないかと思うのです。ちよつとした悪戯ですね。この混乱は疑心暗鬼と言っても良いのか

この第三連の前にある二つの第一連と第二連は、ひかりが木にあたり、そこに「あざ」ができ、そこから木が裂けてくるという、とても印象的なイメージとして言葉で示される。出来事としては透明で美しい景色を映し出します。そこに、違和感はあるほどありません。いや、むしろ気持ちのよい、穏やかなひかりと爽やかな風(推進力)に包まれた情景が、破綻なく続きます。そして、第二連の最後の「ひかりを、なじった」という日常ではあり得ない言葉の状況に続く、上記の第三連では、それまでの前提にない言葉が連なっています。

「すてられたさかな」という言葉が突然に出てきて、それまでの印象が混乱します。新緑の美味しい空気の中に魚臭が突然混じってきたような、そんな感じですね。意識の中で言えば、これまで、あった世界がすべて、ただ読者一人だけ(自分一人だけ)を残して、ズレた。そんな感覚です。そして、立て続けに、「さかなの息」という、この連の言葉の流れとしては自然ですが、現実にはない混乱に輪をかけたように想像をかき立てる、あるいは奏えさせる詩的な言葉遣いが出てきます。

多分、さかなは、陸上に打ち上げられて、ビクビク動いているのだろうと思います。そして、砂まみれになって、みずみずしさを失ってゆき、死に絶えるのだと思います。その命の生々しき、重々しき、死の残虐さを、詩行の中で感じ取るために、作者は、前の二連の調子を落とさず、敢えて「生きて、いようとすることがようやく、おかしくなる。」とさりげない表現を使います。この不自然を不自然と思わせない言葉の感覚は、素敵です。

しかし、私は、この詩にも、やはり、よそよそしさを感ずります。それがいけないと思っているわけではなく、面白いのです。黒崎氏のこの作品は、先に示した金澤氏の作品と同じで、他所(よそ)に立ち位置を持つ、そういう客観的な意識を持っています。それが、外的刺激だと言っても良いと思います。

詩が、言葉として韻を踏んだり、繰り返しを行ったり、世界を含有しようとして抽象的な表現を行ったり、また人間の言葉としての「生きる」証だったりする。そのような表現を詩的表現と言えば、この「よそよそしい」

もしれません。これら三篇の詩は、方法論が際立ちます。作者の拠って立つ、立ち位置がよく私にはわからないので、「気がする」とか「思う」とか、まさに自分勝手な感想になってしまのですが、私の最大の興味は、この詩の外から出てくる、その素となる先の方法論、別な言い方で言えば外的刺激は、新鮮味というとても魅力的な言葉を生むのですが、それが果たして、日常的に今の詩に触れていない、あるいは作者(方法論)を知らない人にどれだけ、新鮮味として伝わるのか。伝わったとして、それが新鮮味以上の魅力として伝わるのだろうか、ということですね。

つまり、詩に興味のある人、あるいは作者に興味のある人以外にどれだけ、これらの作品は読まれるのだろうかということですね。感覚を研ぎ澄ますことで詩が読まれる。この詩誌を手取る、そこに行き着くことを、よそよそしさが拒否しているということにならないかということをおもいました。

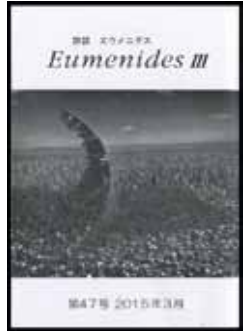
最後に、編集で意図したのか、しなかったのか、わかりませんが、冒頭の清水哲夫氏の「自分」が言葉に溶け込んでいる作品との対比で読むと、とても面白かったです。

▼20150407 洪水企画の池田康氏から、第四詩集の礼状あり、嬉し。  
▼20150414 購入した詩誌『北奥気圏』第十号が到着。特別附録の橋本尚志氏のモノタイプ版画一葉が素敵。

▼20150414 詩人金子忠政氏から事前の予告どおりに、彼の瀧口修造に関する評論を載せた詩誌『エウメニテス Ⅲ』第四十七号が届きました。贈呈に感謝申し上げます。ただいておきながら、こんなことを書くのは不遜なのですが、多分、私は金子氏の評論だけでは、金子氏が何故、今、瀧口修造にこだわるのか、解らなかつたと思います。正直、人というものは、そういうもの、つまり過去に犯した自分の過ち、あるいは「はじらい」に對しての身の処し方、あるいは向かい合い方は、こうしなければならぬということではなく、単純に「言え、人それぞれの処し方があって良いことだ」と考えていました。だから、私が、瀧口修造のことを、今でも、尊敬する、いや私淑する詩人だと言ってはばからないことに、ならん金子氏の評

論は影響を与えないと考えていました。そのこと（戦争翼賛を行ったこと）に対し沈黙し、さらにそのことに正面から向き合わなかったこと）をもってしても、私の瀧口修造への想いは変わらなないと考えていました。

しかし、この特集「シュールリアリズム」という四つのシュールリアリズムに関する評論を載せた詩誌『エウメニデス Ⅲ』第四十七号を読んで、金子氏の言わんとしていること、そしてその評論の目指すことが、おぼろげながら解った気がしました。それは、金子氏が、どうして瀧口



修造に拘るのか、その理由がわかったと言っても良いのではないかと思います。具体的には、詩誌に収められている四つの評論のうちのもう一つ、京谷裕彰氏の『シュールリアリズムの二十一世紀(一)』という連載の評論と合わせて読むと、今の現代詩の状況に対す

る、ある明確な問題提起が浮かび上がってくるということです。

京谷氏の、難解な言葉や外来語が頻出する評論は、私の誤解と無知を承知で書かせていただければ、日本におけるシュールリアリズム運動の受容を再度、今、振り返り、俯瞰した目で見下ろして、如何にその受容がヨーロッパで起きたシュールリアリズム運動の本質が抜け落ちたものであるかを、さりと指摘したものであると、私は理解しました。

その上で、再度、今、抜け落ちた本質がどのようなものであったのかを確認し、本来の意味でのシュールリアリズム運動が持っている「政治性」と切り離すことができない本質から、現代社会を問い直すそうとしているものでありました。そして、今の二十一世紀に問い直すことに、大きな意義があると京谷氏は語っています。

例えば次の文章

その異議とは、京谷氏が語るところのシュールリアリズムの本質、「 $\wedge$ 美学 $\vee$ と $\wedge$ 政治 $\vee$ の不可分性であり、 $\wedge$ 理性 $\vee$ と $\wedge$ 実存 $\vee$ との相克であり、批評における $\wedge$ 判断能力 $\vee$ の問題であり、 $\wedge$ 交わり $\vee$ と $\wedge$ 共 $\vee$ にあることのエチカであり、 $\wedge$ 愛 $\vee$ をめぐめる現象学と形而上学であり、現代美術と現代思想が主題化する無数の問題系である。」と理解しました。

金子氏が瀧口修造を例に出して異を唱えていることは、今、書かれている多くの詩が政治に対して、関わりをせず、いやむしろ避けている、沈黙しているということであり、それは京谷氏が語るところの $\wedge$ 美学 $\vee$ と $\wedge$ 政治 $\vee$ の不可分性が、現在の詩の状況では、あまりにも欠落しているのではなからうかと、思った次第です。

では、私のような瀧口修造に私淑している「なりそこないの詩人」気取りの人間は、この金子氏の問題敵に対してどうしたらよいのか。

それは、自分自身の態度として考えてみれば、「権力の発生に對して敏感になることである。」ということしかないような気がしています。社会と関わって生きるとは、常に、権力と関わることになるのですが、その中で、できる限り（本当は徹底的に）言いたいところですが、それは無理ですから、権力を持つ側に立たないということとです。机上の空論として取捨して書けば、「徹底的」とは、社会の中で他人との関係を持ちながら生きていく限り、瞬間瞬間、常に、自分自身が権力の側に立っているという自覚を持ち、それを否定する態度を貫き通すということだと思います。誤解を恐れずに書けば、この「徹底的な態度」を取らなかつた瀧口修造は、祭り上げられべき詩人ではないということだと思います。

▼20150415 日本画家、高橋睦さんから日本酒が届く。私の方こそ、お礼をしなければならぬ方なのにな。

「デジタル・アナログとを問わず、あらゆるメディアが無意識や下意識に直接すり込むサブリミナル・インパクトによって害された認知や情動の回路を組み替える。始まりの場所へとつねに立たせてくれるからだ。」

というふうには。

ここで、一つ私見を書かせていただければ、それは、シュールリアリズム以前のヨーロッパの芸術運動であるいわゆる未来派宣言の日本における受容が、大部分は美術界の小さな運動に終始し、結果、その形式のみであったという前例をどうしても考えてしまいます。つまり、現代社会において、幾ら、もたらしてくれる海外の情報量とスピードが進化したところで、所詮、私たちは当事者ではあり得ないということです。その結果、シュールリアリズムの本質を明らかとして、そこから、「次回以降、シュールリアリズムが開示するいくつかの問題系へと話題を拡げてゆくこととしたい。」としても、どこまでいっても偏見に満ちたものであり、筆者自身の血肉となり、実践を伴わない限り、同じことを繰り返すということではないと思います。

その良い例が、京谷氏がこの詩誌で発表している作品「凍りつく魚とおぼしき色刷り銅版」が如実に表しているのではないかと、思わずにはいられません。それは、かなり、よそよそしいのです（季刊『ココア共和国』vol.17の感想を参照してください）。

私が前記した「同じことを繰り返す」ということ言わせていただければ、それは、金子忠政氏の瀧口修造に対する態度とどこかで通底していると感じます。それは、あまりにも私が独りよがり、飛躍しすぎなのかも知れませんが。

では、金子氏は、どうして瀧口修造の戦後の態度にこだわるのか。それは、瀧口修造という個人に対してではないということも明白だと思います。それでは、何に対してか。それは、瀧口修造に私淑する私のような「詩人」と称する人間があまりにも多い今の状況、つまりいわゆる詩壇と言われる権力・状況に対して、異議を唱えていると解釈します。

### 無意味な意味の尾形亀之助読書会 御案内

詩誌『回生』では、隔月の奇数月（変更もあり）に、定期的に詩の可能性を考える「無意味な意味の尾形亀之助読書会」を開催しております。御参加はどなたでも可能です。参加料は無料です。ただし、席に限りがありますので事前に小熊まで連絡をいただくと助かります。

2015年7月以降の開催予定は以下のとおりです。

2015年 7月18日(土) 午後1時30分から午後4時30分

内容 「亀どの句会」 ※ 純粹な句会です  
場所 繁昌院本堂 (大河原町)  
仕切り 渡辺誠一郎氏 (小熊座、俳誌『小熊座』編集長)  
お願い 参加される方は、5句ご持参ください。

2015年10月24日(土) 午後

テーマ 「耳を澄ませて亀之助の詩を聴いてみませんか」(仮題)  
場所 えずこホール「平土間ホール」  
内容 武田こうじ(詩人)による尾形亀之助の詩の朗読  
詳細 構成及び時間は、後日お知らせいたします。

2015年11月22日(日) 午後1時30分から午後4時30分

内容 「亀どの句会」 詳細は、7月18日と同じです。

崔<sup>チエ</sup>君

かれはペットボトルを静かににおいて、禍々しい集団の前に立った。もう一度映像を見てみよう。この映像で、一番見るべきポイントはどこだろうか。排外主義の暴力が行われていることだろうか。彼の抗議行動はバナーを持ちデモの前にただ独りで立つことであって、決して襲い掛かることだったわけではないことの確認だろうか。確かにそれも重要かもしれない。しかし、一番見なければいけないのは、彼が、人の往来が絶えない道端のすみに、ペットボトルをそっと置き、ゆっくりとデモのほうに向かう、その瞬間、である。

C氏

ぺちゃんこに潰れた車体のあいだに、四人目の同乗者が横たわっていた。かれは即死だった。衝撃で半ば後方のトランクに乗り上げたようになり、静かな、びっくりしたような様子で、目は少し飛び出し、項は少量の血に染まって、横たわっていた。ポケットを探ったとき最初に見つかったのは、もう無効になった帰りの切符だった。やっと身分証明書がでてきた……、アルベール・カミュ。

最後の審判は毎日くだされ、真冬に揺るぎない夏があり、転落は夜明けに起こる。

微笑み

仕方がよくわからない。冗談がわからない。微笑みに測定され、欠伸が止まらなかった。唐突にやってきて唐突に去ってゆく。露わになるのはそれが自動的なものである場合だけだ。ルールを無視するように軽く笑ってやり過ぎし、道なりの草々の露もなぎはらい、山陰にちぢこまった。魂が地下へ帰還していく、一粒のからだねのように小さく、着地点へ向かう一瞬を、きわ立たせようとした。

眼底に着床した同級生たちの泣き顔に、「別に……」と声明した。両足の先の夕日の中は、カウンセラーの分析のように湿っぽく蒸し暑い。山陰にじっとしゃがんで、傾城森から降りてきた風は無防備にさらし、真夜中じゅう木々の間を足早にぎくしゃく駆け抜けた、あの郵便配達夫が微笑む、彼方に眩暈したい。胸の中で配達不能郵便がざわめきはじめた。どこでもなく蛇行していく街道を歩き出し、辻の地蔵の微笑みに、「別に……」と声明した。

# 歩く道に

小熊昭広

歩く道に  
日本が  
落ちていたら

わたしは  
それを  
捨うだろうか

例えば  
それが黄金に光る  
ピンバッジだったなら

確かに  
わたしは  
捨うだろう

そして  
誰にも言わずに  
家に持ち帰るだろう

いつの日か  
背広の胸に着けて  
出掛ける日がくるのだろうか

もし  
歩く道に  
携帯電話が落ちていたら  
たとえ  
使い込まれて

ボロボロになっても

わたしは  
迷わず  
それを捨うだろう

そして  
その場所の  
管理者か近くの交番に届け出るだろう

その理由は  
それが  
大切なものだと思うから

わたし  
ではなく  
その人にとって

教科書の中の  
歴史

ここは  
目には見えない  
だからわたしは想像する

例えば  
パスポートの中の  
印影

いろいろな  
景色が  
見えてくる

例えば  
オリンピックでの  
表彰台

大切な  
ものだから  
守る

例えば  
全校集会での  
国歌斉唱

ちちはは  
父母や  
子供達に妻は  
わたしにとって大切なもの

例えば

その人達が  
安心して住めるこの場所を  
わたしは守りたい

だから  
わたしは  
迷わずに拾う

大切な  
ものを守る人が  
見えるから

そして  
ただの象徴は  
飼い殺す

## 子は聖職者になりたいと、言う 小熊昭広

夜に、わざと寝たふりをして、朝まで起きていた。そして、<sup>ひそか</sup>は本当に起きているふりをしている。ソファーに座っておかあさんと挨拶をしている人。これから、そうだんがはじまる。理由はわからないけれど、夕闇の時間が近づいてきて、西側に面した、その部屋には、薄いガラスを通し、光が斜めに太陽に注いでいる。その反対側では、壊れたブラインドから、模様となって、明かりが、わたしたちにも落ちてくる。今は、明るいのに、まだ夜。いや、鳥の時間なのかもしれない。

それは、方位を信じること。

彼女はさいしょ、黙って話をして  
いるわたしを見ていたようだ。私は、そのことに気づかずにそうだんをしていた。いや、何がはじまりなのかわからない。空を、雲が通り過ぎた。沈もうとしている日の光は、マッチ棒の明かりを大勢で照らしている。だから、ときどき灰が舞う。

気がついたら、休みの日には街中を、終日、歩いていた。そして、家々の、様々な色やかたちをした玄関で、擦れ違った人々に声を掛けた。そうだん、がはじまった。どうして、来たのと問う私に、彼女は黙視している。細長く空に伸びた、しかくい棟の最上階で、父は、まいにち髪をなでていた。そのつるんとした黒光りする男は、硬かった。そこにも西日が注いで、太陽を照らしていた。

そうだんは、進まない。だから、ここに来ているのかもしれない。灰色のアスファルト越しにファミレスが見える。「ミルキーウェイ」という看板、そして尖塔。あの先に、あの硬質の男がいる。圓い命を、自分で砕いた。父はモザイク。

どうして圓いの中を出ることができなくなったの。その理由を説明してくれるそうだんしゃはいない。みんな、黙って下を向いているかただわたしの声を見ているだけだ。そこで、わたしは、少しずつ圓いを砕いてゆく。結局、この西日が注ぐ部屋の中に、わたしの言葉だけを差し出すことになる。

わたしは、部屋の中で待っている。彼女が話し出すのを。しかし、沈黙がいつまで続くのか。それでは、そうだんにならない。何も始まらない。しばらくたってこちらから語りかける。「最近、なにをしているの」。「」。。「そう」。「圓いから出ようと思うの」。「」。。「そう」。「また、来てくださいね」。「はい」。「良いことをするの」。「それは、どういうこと」。「ははとおなじように、なりたい」。「仲がいいね」。「はい」。「また、いっしょに来てね」。「はい」。

「朝になると、頭が痛くなる」。「」。。「圓いをでなきゃと、思うけど、まだ

出られない」。「」。。「また、来てね」。

「最近どうですか」。「こういうことがありました」。「」。。「特別、変わったことはありません」。「また、来てくださいね」。

道を間違えたらしい。そこは、市役所の三階、窓から、あの尖塔が見える。そして、硬い頭も見える。男は、目の前で、なにかを話している。こんなことをしていて、いったい、何になるのだろうか。到達点を、どこに置いて良いのだろうか。彼は「よろしくおねがいます」。「」。。「どうもありがとうございました」。「(もう、会う必要はないだろう)」。

通り道、だった。青い、芽が生えていた。「はい」。そう言うと、さっき、そうだんしたことを語り始めた。

「原因は、どこにありますか」。すると、「あなた」と言われた。わたしは「私を」切り捨てられない。どうしよう。つまり、こうです。信仰を捨てなさい、ということのようです。「わたし、捨てられません」。一歩、いっほずつ動いています。まだまだ先があるので、急がない。「急がないで」と言いました。そのほかのことは、何も言いません。「そのまま」立っている。今いる場所が、青いビーズの影になるの。

やはり、信仰を捨てます。と、隣に座っていた彼女が言った。「そうですか」とは、私は言わなかった。そんなことが、この日の注ぐ部屋で過ぎ去った。青いビーズは、まだ光っている。

ポプリの虹が消えた。その、枝がささ、ささっと揺れている。圓いの中から、出ることができない彼女は、俯いた。足音は、静かな音を立てて駆へと向かってゆく。それを追いかけて、私の記録帳には、出だしの言葉が書かれている。「今日は、はがきを投函した」。こういうこと。くるう、しい、こと。わからない、こと。枝先で、まあるい鳥が、かたちを震わしている。あの圓いの中では、細い足首が、キュツと締まっている足首が、野面のような表情をした男達が、ひしめいている。

外では会ったことがない。彼女は、<sup>よ</sup>他所ゆきの服を着て、わたしの顔を見る。あそこへ一度行ってみたかったのに、行けなかった。そういう彼女はわたしと似ている。あれから二年。彼女は、朝にちょっと。夕方にちょっと、といった具合に。太陽の光へと斜めに注ぐ時間を狙って、影の動きをし始めた。一度、あそこに行ってみたかった。しかし、まだ実現していない。そして、彼女の視線は、遠くの方からやってくる人に移ってゆく。もう、目の前のわたしには興味がないらしい。

尖塔から見下ろしたこの街の景色は、人々が玄関のチャイムを押している。あれが、妻、あれが娘。この二人は、いったい何を捜しているのだろうか。



## ランダム・メモリー

■予定よりも、一月遅れた発行です。頻度としては、半年に一回くらいがちょうどよいかもしれませんが、詩誌を発行することが目的という点ではなく日々生活している中で行為の結果という感覚が最近あります。

■「詩誌『回生』の情報ボイス」というポッドキャストを始めて、詩のことを考える時間が多くなりました。だから詩が書けるようになるわけでもありません。これまでよりも良い詩のようなものを書けるとか、詩のようなもの書き方が変わるわけではないのですが、日常の中で物理的でないものの比重が少し増えたような気がします。しかし、「詩を書こう」とする意図的なものは、確実に薄らいできていく自分を感じます。

■詩誌『回生』は、二人誌という点なのですが、個人誌ではないところで言えば、集団の最小単位という点だと思います。一人では見えないところを、他人の目で客観的に見るというのができるのはありがたいと思っています。しかし、これが三人、四人となると、どこか意図にならないところで、力関係が生じてしまっていると思います。詩誌『回生』の中の取り決め事は、特にありません。出した方が出すところについて、編集したい方が編集するところのことだと理解しています。

■今号の作品は、前号「ていど通巻(の回)」にほぼ同じ顔ぶれの作者になりました。「回生」らしくてどうものには特にならぬと思うのですが、気のせいがある種の雰囲気のようなものがあるように、今回は思えました。それは、コールドプレイの曲を聴きながら通して読んでみたときに少しばかり遠心力のようなものを感じた、とどう微粒子のようなものでした。

■日常のさりげない言葉だったと思います。何も、大きなことを書く必要はないのです。自分の足下のごとで十分なのだと思います。言葉は、窓から流れてくる風に対応して震える葉のうななみもの、触る画面に動きを止めてしまします。かと言って、窓が開かれていれば良いかというところもやってみないといけません。動き出さなければ、自分が歩き出せば良いのですが、そうなるという言葉が小さく見えてきませぬ。

■最後に、今号に寄稿していただいた四人の方々に厚く感謝申し上げます。それの方々にとって、この号がなにかしらの糧となっていただけばと切に願っています。

■そして、最後の最後に、表紙画は、今号も明子さんをお願いいたしました。ありがとうございました。(龍)

## 詩誌「回生」第6号 (通巻第三十七号)

発行 二〇一五年五月二十日

編集 小熊昭広

表紙画 明才

発行者

中村正秋 (なかむら・まさあき)

〒371-0103 群馬県前橋市富士見村小暮

2225-15 tel 0272-88-9073

gcom@garagecom.jp

小熊昭広 (くまの・あきひろ)

〒989-1201 宮城県柴田郡大河原町大

谷字原前 50-5 tel 090-5230

-2349

kaisei@poetic.jp

Twitter @snishikaisei

発行所 快晴出版

定価 フリー (時価)